

2009 年度・研究旅行奨励制度 【個人】

名 前	松吉 有希	研究テーマ	ミノア文明の遺跡研究—ミノア文明の世界観—
目的地	国 名	地域・都市名	
	ギリシャ	アテネ、クレタ島、イラクリオン、クノッソス、フェストス、レシノム など	

研究旅行の目的

- ・資料館や遺跡をみることで文献からではわからないミノア人の世界観を考察する。
- ・地母神信仰を考察するためにイダ洞窟やディクティ洞窟（ミノア人の信仰場所）に訪れ、ミノア人の宗教（信仰）母神を考える。

補足説明

私がミノア文明に興味を持ったのは、高校の世界史の授業でミノス王のギリシャ神話を聞いた時に「面白い。神話で語られている宮殿をみたい。」と思ったのがきっかけである。ギリシャ神話に拘わらず、神話にまつわる多くの遺跡は今も世界の人々を惹きつけてやまない。神話が歴史のすべてを語っているとは言えないが、神話を通して古代の歴史に興味を持つ契機となることは、確かである。

遺跡は古代人が想像した世界を現代の私たちに伝えてくれる重要な役割を果たしているとともに、古代人の生活や習慣、世界観まで様々なことを教えてくれる。その魅力に私は惹かれ、特に遺跡に興味をもつきっかけとなったミノア文明を中心にその世界観を考察したいと思った。

期待される成果

- ・文献からわからなかったミノアの世界観を知ることができる。
- ・ミノア人の世界観の一部である信仰の対象として、地母神信仰がミノア人にはどのように影響を与えていたのかを知り、その後、ギリシャ本土の信仰との関係をさぐる情報を得ることができる。
- ・イラクリオン博物館の学芸員の方から現在の宮殿の状況やミノア文明についての考えを聞き、最新の情報を得ることができる。（現在、交渉中）

備考

通訳は、現地の日本人の方に現在、お願いをしている。山に行くにはギリシャの自動車免許がいるため、交渉中の日本人の方に頼むかタクシーを利用しようかと考えている。

旅行日程表

[9日間]

	滞在地	行 動
第1日目	シンガポール	移動：福岡→シンガポール
第2日目	イラクリオ	移動：→フランクフルト→アテネ→イラクリオ
第3日目	イラクリオ	イラクリオ考古学博物館

第4日目	クノッソス	
第5日目	フェストス	
第6日目	マリア	
第7日目	マリア	調整。イダ山とディクティ山)
第8日目	マリア	イラクリオ→アテネ (国立考古学博物館)
第9日目	福岡	移動→フランクフルト→シンガポール→福岡

補足説明

方法

- 3つの遺跡を巡る (クノッソス、マリア、フェストス)
※公共交通機関を利用できるため…
- イラクリオン博物館 (クレタ島全土の出土品がみられるため)
レシノム博物館 (ミノアの女神像やアフロディーテ像などの女神の出土品が多いため)
アテネ国立考古学博物館 (ミノア時代からミケーネ時代にかけて転じひにやギリシャの女神をみてみる)
学芸員の方にミノア文明についての話を聞く (現在の宮殿や研究の進み具合など)
- 信仰場所を訪れる (山岳信仰の対象である2つの洞窟を訪れる。ゼウスの誕生と関係があり、ミノア時代からローマ時代にかけて信仰の対象だったためミノアの信仰の特徴をしる手がかりになるのでは?)

今回私が調査するのはクノッソス、マリア、フェストスのミノア文明の主要な宮殿だが、この遺跡は宗教的、政治的役割のほかにも経済的役割も担っていた。特に宗教に関しては、宮殿からの出土品である「パリジェンヌ」や「牛跳びの図」などのフレスコ画や「蛇女神」のファイアンス、女性による祭儀の光景を描いた黄金の印章指輪を写真でみるかぎりでは、女性の宗教的権威が大きかったと考えられる。日本で言えばシャーマンのような…特にミノアの3つの象徴である雄牛と蛇と女神はミノアの宗教と重要な関係があるため、今回はこのような出土品、宮殿、山を中心にミノア文明の世界観を研究したいと思う。

また最近の研究ではクレタの先住民がエジプトやオリエント世界からの影響を強く受けていたことがわかっているため、今後ミノアの世界観を考える際の参考にしていきたい。

仮説

文献からみる出土品からのイメージから考えると、ミノアの世界観は女性の神官が中心となって宮殿の祭儀をおこなっていたのではと思う。しかし、宮殿には再分配基地としての役割もあるため、女性が最大の権力を握っているというよりは、祭儀の時に活躍する神官としての存在であったと思う。

宮殿では、線文字 A を使った管理体制も行われ、北アフリカからダチョウの羽毛、エジプトからは雪花石膏、エーゲ海の島々からは金や銀、イタリアやヨーロッパ中部原産のスズを輸入し、地元で採れた

銅と混ぜて青銅をつくった。その代わりにフェストスは青銅の加工品、ザクロは象牙製品、マリアは金細工という風に宮殿の工房で作られた商品を輸出していたようだ。

海外との交易も活発に行われていたので、商人や職人の地位も高かったと思われる。貴族か官僚のような地位の高い者が宮殿の食料を管理することによって、次第に人々の生活を支配する権力を獲得していったらうし、埋葬時の副葬品に差がみられることから早い時期から格差社会が生まれていたようだ。

奴隷がいたという説もあるが隔離された場所もないし、壁画にも登場しないことから身分の差は大きくなかったと思う。もしいたとしても、ひどく低い身分ではなかったらう。(身分については、島を統一した王がいるという説の場合は必ずしも差はないとはいえないが)

宮殿が建設されたことで、宮殿の王の周りに住む農民が宮殿に年貢をおさめていたという説もあるが、クノッソスの南にあるメッサラー平野は、余剰食糧がでるほど肥沃な土地で豊かであり、島内で対立や統一に向けた活動跡がないことから年貢がゆるいものであったか、支配者の権力に従うというよりも神官を兼ねた支配者に年貢をお供えするといった支配体制だったのではないかと考える。宮殿が建てられたのも、先人の複雑な集落跡をもとにして人工の小山に作られているので、機能的ではないし支配の統一化を図ったものではないと私は考える。

もう一つの疑問は、クレタ島全域を支配する権力者がいたのか、宮殿を中心にした共同体の集まった小王国であったのかということだ。現在は不明であるが、南は丘陵地帯、南東はディクティ山脈、南西はイーデー山脈によって囲まれているため一人の王が山脈を越えて絶対的な権力をもっている可能性は低いし、宮殿や出土品からも絶対的権力を象徴できるものはない。

しかし、それぞれの王がその周辺の地域を、その宮殿を中心にして独立的に支配していたと考えたとしても、なぜ領土争いが起こらなかったのか不思議であるし、ただ平和を好む民族だったと考えるにはあまりにも単純すぎる。

周辺にいる人々に対して敵対心がなかったため宮殿に城壁をつくらなかったと考えると、宮殿を中心としていくつかの独立した共同体が併存し、その共同体が共通の何かをルール？として持っていたために平和に過ごせたのだと思う。それがミノアの世界観とつながる宗教ではないか。